

島根

特集・2



神話に彩られた日本のふるさと「島根県」。

旧国名にない、現在も出雲地方、石見地方、隠岐地方の3地域に区分されることが多い。神話の舞台として有名な出雲は、出雲大社をはじめ数多くの古社がある。

奈良時代には『古事記』や『日本書紀』などが記され、スサノオや大国主の神話が生まれた。石見銀山は、江戸時代前期に最盛期を迎えた日本最大の銀山だ。

2007年、石見銀山遺跡とその文化的景観が日本で14番目の世界遺産に登録された。

古来より流刑の地とされた隠岐には、鎌倉期の後鳥羽上皇や後醍醐天皇をはじめ多くの貴人が流された。

そのために中央文化が流入し、現在でもどこか都の風情が感じられる伝統や文化財が残っている。



写真は松江市の代表的な銘菓「若草」。江戸時代後期の大名茶人、松平不昧公の御歌「曇るぞよ 雨降らぬうち に摘みてむ 桐尾山の春の若草」に由来して命名されたという



神話に彩られた

日本のふるさと「島根県」



都市で失われた資源を生かし、「活力ある島根」へ I・Uターン者を引き付ける温かな地域社会



棚田

豊かな自然が残り、
伝統、文化が次代にしっかりと
継承されてきた島根県



龍源寺間部(石見銀山)



石見神楽



島根県知事
溝口善兵衛さん

◎プロフィール

- 1968年 東京大学経済学部卒業。同年大蔵省入省
- 1996年 大蔵省 主計局次長
- 1997年 同 大臣官房総務審議官
- 1998年 同 大臣官房長
- 1999年 同 国際局長
- 2003年 財務省 財務官
- 2004年 財団法人国際金融情報センター理事長
- 2007年 島根県知事

高齢化率、34年連続で 全国第1位

「総務省統計局の発表によれば、島根県は全国で最も高齢化率が高い県となっており、高齡化社会ではユニバーサルデザインが重要な視点になると考えます。」

溝口「島根県の高齡化率は、1975年から34年連続で全国第1位です。さまざまな理由が挙げられますが、島根に限らず日本全体に言えるのは、大都市を中心に産業が発展してきたことが、地方の高齡化率を高める原因の一つになっています。大都市では産業の発展に伴い、雇用の機会も拡大し、それに合わせ、若い人たちがどんどん都市部に集まってきました。その結果、地方に残るのは高齡者だけという構図ができあがってしまいました。県内の高齡化率が高い中山間地域には、集落を維持することさえ難しいところも出てきています。」

ユニバーサルデザインの精神は、県が進める「ひとにやさしいまちづくり」の政策の中に含まれていると思います。障害の有無に関わらず、高齡者から子どもたちまで、島根県に暮らす人々の生活環境を持続向上させるのは、県の政策の重要な要素です。全国の自治体でも公共施設のバリアフリー化が進んでいますが、島根県ではこの6月の補正で、「しまね長寿の住まいリフォーム助成事業」として、既存住宅のバリアフリー化を進めることとしました。

また、島根には出雲大社(出雲市)や世界遺産に登録された石見銀山遺跡(大田市)など、全国的にも有名な観光地があります。高齡の方や障害のある方の中には、車いすを利用されている方がいらっしゃいますが、車いすに対応しているトイレがどこにあるのか分からず、外出を控えている方もいらっしゃると思います。県では県内のNPOと協力して、「車い

すトイレマップ」を作成し、県のホームページ上に公開しています。このマップが県内外を問わず、車いすを利用されている方々の観光や普段の生活の一助になれば幸いです。

さきほど、中山間地域のことについて触れましたが、中山間地域では採算が取れないため、路線バスなどの公共交通が次々と廃止されています。地方は車社会ですので、運転ができない人にとっては、生活圏はとて狭くなってしまいます。

そこで、県では、喫緊の課題となっている中山間地域の交通を重点的に支援することとしました。例えば、デマンドバスの運行支援です。利用する際には、事前に電話やFAXで予約をしますが、基本ルート以外の停留所へ迂回することもでき、利用者の要望に柔軟に対応できます。料金は200〜300円で、買い物や通院の際に利用していただいています。県はこうしたデマンドバスを運行する市町村に対し、助成を行っています。

地域で果たす「もう一役」

「島根県ではボランティア活動が盛んだと聞きます。」

溝口「2006年の社会生活基本調査によると、島根県のボランティア活動率は34%と高く、全国2位です。県内のNPO法人の数は2008年3月末現在で

193法人、人口10万人当たりで見ると全国13位にランクされており、県民の社会貢献活動への参加意識の高さがうかがわれます。さらに、島根県では職員「一人もう一役運動」を推進しています。職員の多くは家に帰れば子どもたちの父親であったり、母親であったりします。県職員と家庭での父親・母親、この2役に加えて、NPOや自治会が行っている社会貢献活動への参加という「もう一役」に取り組んでもらおうというものです。

また、島根には「ハートフルしまね」という地域に住む方々のボランティアにより県道などの清掃や緑化、草刈を行う制度があります。県は、実施団体に苗や種、軍手、ごみ袋相当額を交付し、万一の作業上



島根県の中山間地域の占める割合は面積では約9割、人口でも約4割を占める



『田舎ごっこ』は、若手の県職員が実際に農林水産業に従事するU・Iターン者をたずね作成した



満口知事の提案から発刊プロジェクトがスタートした『田舎ごっこ』



しまね子育て応援パスポート「こっころ」

田舎の活力をより多くの人たちに発信しようという目的もありました。

プロジェクトを実行するために集まった5人の編集スタッフは、島根県庁農林水産部の若手の職員たちです。スタッフの一人は、デジタルカメラを扱ったこともなかったのですが、このプロジェクトをきっかけに使いこなせるようになり、一冊の本までつくり上げたのです。それを聞いた知り合いの新聞記者が、でき上がった本を見てとても驚いていましたね。

地域再生や活性化には次代を担う子どもたちを産み、育てる環境を整備することが必須です。県では子育て支援にも積極的に取り組んでいます。満18歳未満、もしくは満18歳となった最初の3月31日を迎えるまでのお子さんがひとりでもいる家庭、もしくは妊娠中の方がいる家庭を対象に、2006年からしまね子育て応援パスポート「こっころ」を交付しています。交付された「こっころ」を持って協賛店に行くと、商品の割引等のサービスを受けることができます。6月末現在、協賛店は1800店あまり、「こっころ」は4万7千枚以上発行され、県内の子育て世帯の約67%が利用している計算になります。ちなみに、昨年11月からお隣の鳥取県でも「島根県」のパスポートがそのまま使える連携協賛店の登録が進んでいます。

また、県では従業員が仕事と家庭の両



従業員が仕事と家庭の両立がしやすい職場づくりを進める企業を「こっころカンパニー」として認定。その中から特に優れた取り組みを行っている企業を知事が表彰する

立がしやすい職場づくりを進める企業を「こっころカンパニー」として認定し、その中から特に優れた取り組みを行っている企業を表彰する活動もしています。6月末現在、104社が認定を受け、認定を受けた企業は県の中小企業制度融資において金利の優遇が受けられ、県のホームページや広報誌、新聞でのPRもしています。

島根には都市部にはない魅力的な地域資源がたくさん残っています。今、全国的に地域が持つ魅力的な資源が見直され、注目され始めています。島根の魅力を活かしながら、新しい工夫や取り組みを通して、さらに住みやすい地域づくりをこれからも進めていきたいと考えています。



運行を開始したデマンドバス。中山間地域の移動を支える



県民のボランティアが支える道路の美化活動「ハートフルしまね」

の事故に備えて傷害・賠償責任保険への加入手続きと保険料を負担しています。現在では、約900団体、6万4千人の方々に参加いただいています。大切なのは、ボランティアに参加することが決して特別なことではないという意識です。

普段の生活では、とすれば家庭と職場の行き来のみになりがちです。職場の中の付き合いはありますが、定年退職をきっかけに職場という居場所がなくなる、自分を取り囲む世界が急激に狭くなります。家庭と職場という2つの場所を取り囲むように地域社会がある訳ですが、勤めている間はなかなか自治会の活動にも参加できず、退職してからのいきなり飛び込もうとしても心理的に難しいところがあります。ですが、日ごろから地域の美化運動などに参加するなど、地域とのつながりをもっていると、退職という大きな変化があっても世界はそれほど狭くなりません。

遅れていた島根は、実は先頭グループに居る

知事が掲げる「活力ある島根」を実現するために、地域再生や活性化が必要だと

思われず。

溝口「私は島根県西部にある益田市で生まれました。長く東京で暮らし、大蔵省に入省してからは仕事で外国にも8年ほどいました。2007年春の選挙で、40数年ぶりに郷里の島根に帰ってきて、都市と地方の違いを実感しました。驚かれるかもしれませんが、島根県内で中山間地域が占める割合は面積で約9割、人口では約4割です。私は今、県庁所在地である松江に住んでいます。県内をいろいろ訪ねて、多くの方にお話を伺っていました。そういうことを通して、島根のよさや抱えている課題などがよくわかってきました。東京においては地方のことは判らないなあということを実感しています。

私は島根を紹介するとき、「豊かな自然が残る、伝統、文化がしっかりと継承されていること」や、都市部では失われて久しい「温かい地域社会と人間関係が維持されていること」に触れます。これは、島根の発展が遅れてきたことによる部分があります。日本は明治以来、欧米先進国に追いつこうと、中央集権的な政策を選択し、実行した後発国から先進国へと飛躍しました。しかし、日本が成熟した社会にな

り、これ以上先に進むのが難しくなっています。そんな中、少しずつですが都市部から地方への人口の逆流がはじまっています。私はつねづね「分権」も大切ですが、「分散」に力を入れるべきだと思っています。殺伐とした大都市にはない潤いを島根に求めて、志ある若者がIターンで県外から農業、林業、漁業の担い手として来たり、定年後の終の棲家として定住したりする人たちが現れています。このような人の流れが、大都市部に集中させてきた経済や行政機能の「分散」を促す小さな一歩なのかもしれません。

「農林水産業に従事して頑張っている若者を紹介し、新たな担い手確保のきっかけになるような本がでないか」という思いから、昨年『田舎ごっこ』という本を発行しました。

都市から島根にU・Iターンすることを考えている人たちの多くは、「そこで生活できるのだろうか」「子どもたちの教育はどうしているのか」「土地の人は親切にしてくれるだろうか」など、疑問や不安を抱えています。その疑問に答え、少しでも不安を解消する実践的なガイドブックのようなものをめざしたのですが、同時に、